

## 抗菌薬による帝王切開時の子宮内膜炎発症予防効果に関する ネットワークメタアナリシス

[背景] 世界中で帝王切開による分娩の割合が上昇傾向にある中、どの抗菌薬を予防的に投与することで、感染症の発症が少なくなるのか包括的な評価がなされていない。

[目的] 帝王切開後の産褥感染として最も発症割合の多いと考えられる子宮内膜炎を最も予防できる抗菌薬を明らかにする。

[対象] 帝王切開時の予防的抗菌薬として多く使用されてきているセフェム系とペニシリン系抗菌薬の感染症予防効果を調べた Gyte らの研究で解析対象となった研究のうち、アウトカムとして子宮内膜炎を調べていた研究 19 本、5606 人を本研究の解析対象とした。

[方法] 抗菌薬をセフェム系、ペニシリン系の各世代や働きごとによけた抗菌薬群どうしでの比較による伝統的なメタアナリシスと近年注目されてきているネットワークメタアナリシスによって抗菌薬群どうしのオッズ比を算出し、子宮内膜炎発症予防効果を検討する。

[結果] ネットワークメタアナリシスの結果、緑膿菌に有効なペニシリンが帝王切開時の子宮内膜炎発症予防効果が最も高いことが分かった。また、統計的な有意差はないが、緑膿菌に有効なペニシリンに次いで、第 2 世代セフェム系や広域ペニシリンが有効であることが分かった。この結果は、国立成育医療研究センターの診療サマリーなどとは異なる結果となった。